

氏名	宮 脇 大
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 3990 号
学位授与年月日	平成13年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
学 位 論 文 名	若年発症の摂食障害患者の臨床的特徴 －青年期発症患者との比較－
論文審査委員	主 査 教 授 切池 信大 副主査 教 授 荻田 幸雄 副主査 教 授 山野 恒一

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】近年の思春期から青年期の摂食障害患者の増加と相俟って、児童期の低年齢層にも患者が増加してきていることが指摘されている。しかしこれら若年発症の摂食障害に関する研究は極めて少なく、思春期から青年期にかけて発症する典型例との異同が問題となっている。そこで本研究では若年発症の摂食障害患者について、典型的な思春期から青年期発症の患者と直接比較し検討した。

【対象と方法】1981年から1996年までの間に、摂食行動異常を主訴として大阪市立大学医学部附属病院神経精神科を受診した824例のうち、Diagnostic Statistical Manual of Mental Disorder,4th Editionの診断基準でANやBN、またeating disorder not otherwise specifiedと診断され、かつ13歳以下の年齢で発症した24名の女性例を本研究の対象とした(early-onset群)。これらの患者と性別と罹病期間を適合させた、16～19歳の青年期に発症した患者(adolescent-onset群)と発症契機や状況、診断、臨床像などを比較検討した。

【結果】過食、自己誘発性嘔吐と下剤乱用をみとめたものは、early-onset群がadolescent-onset群より優位に少なかったが、診断や問題行動、発症の契機や状況については両群間で統計的有意差を認めなかった。さらにEating Attitudes Test とEating Disorder Inventoryの結果や、SladeのAnorexic Behavior Scaleの結果についても1項目を除き、両群間に統計的有意差を認めなかった。

【結語】本研究の結果は、摂食に対する行動や態度、心理的特徴について、若年発症と青年期発症の患者で異なることを示唆するものであり、今後ますます若年発症の患者の増加が危惧されると考えられた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

近年の思春期から青年期の摂食障害患者の増加と相俟って、児童期の低年齢層にも患者が増加していることが指摘されている。しかしこれら若年発症の摂食障害に関する研究は極めて少なく、思春期から青年期にかけて発症する典型例との異同が問題となっている。そこで本研究では若年発症の摂食障害患者について、典型的な思春期から青年期発症の患者と直接比較し検討した。

1981年から1996年までの間に、摂食行動異常を主訴として大阪市立大学医学部附属病院神経精神科を受診した824例のうち、Diagnostic Statistical Manual of Mental Disorder,4th Editionの診断基準でanorexia nervosaやbulimia nervosa、またはeating disorder not otherwise specifiedと診断され、かつ13歳以下の年齢で発症した24名の女性例を本研究の対象とした(early-onset群)。これらの患者と性別と罹病期間を適合させた、16～19歳の青年期に発症した患者(adolescent-onset群)と発症契機や状況、診断、臨床像などを比較検討した。

過食、自己誘発性嘔吐と下剤乱用をみとめたものは、early-onset群がadolescent-onset群より優位に少なかったが、診断や問題行動、発症の契機や状況については両群間で統計的有意差を認めなかった。さらに Eating Attitudes TestとEating Disorder Inventoryの結果や、Slade のAnorexic Behavior Scaleの結果についても1項目を除き、両群間に統計的有意差を認めなかった。

本研究の結果は、摂食に対する行動や態度、心理的特徴について、若年発症と青年期発症の患者で異なることを示唆するものであり、今後ますます若年発症の増加が危惧されと考えられた。

以上の研究は、若年発症の摂食障害患者の臨床像を解明したものであり、今後この領域の研究に寄与する点は少なくないと考えられる。よって本研究者は博士（医学）の学位を授与されるに値するものと判定された。